

## 研究主題「高等学校における特別な教育的支援を必要とする生徒への指導の工夫

### —体づくり運動領域の『体ほぐしの運動』を通して—

東京都教職員研修センター企画部企画課

東京都立葛飾総合高等学校 主幹 高野幸代

#### I 研究のねらい

平成15年度の東京都教職員研修センターの調査研究では、小・中学校において知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難をもっている児童・生徒の割合は4.4%であった。そして、その多くは中学校を卒業した後は高等学校に進学する。このような生徒の中には、学習や対人関係でつまずき、学習意欲の低下や不登校などの二次的障害を起こす者もいる。

東京都教育委員会は、平成19年には特別支援教育推進計画第二次実施計画を策定し、都立高等学校等において、学習面や生活面で特別な支援を必要としている生徒に対し、適切な指導及び必要な支援を行うことを喫緊の教育課題としてあげ、特別支援教育体制の整備や教員の特別支援教育に関する理解と専門性の向上を図ることを明らかにした。

本研究では、高等学校における特別な教育的支援を必要とする生徒への支援として、体育の体ほぐしの運動を通して授業における有効な指導方法を検討した。

#### II 研究の内容と方法

「特別な教育的支援を必要とする生徒への適切な実態把握に基づいた指導の工夫により、生徒が意欲的な学習活動を行い、自己評価を高めることができる」と仮説を設定し、全日制高等学校の体育の授業において実態把握を踏まえた指導の工夫の有効性を検証した。

##### 1 基礎研究

特別な教育的支援を必要とする生徒の指導上の留意点について、国立特殊教育総合研究所等の文献により整理した。

- (1) 特別な教育的支援においては、当該生徒の困難さに気付くこと、実態把握をして支援ニーズを明確にすること、支援はできるところから速やかに始めることが重要である。
- (2) 高等学校段階では、自信を極端に無くして無気力になったり、不登校など二次的障害として問題が現れたりすることがある。積極的な称賛等により自己評価を高め、自信や意欲を回復させ、二次的障害を予防・改善することが重要である。
- (3) 実態把握においては、学習上の困難さや行動上の問題だけでなく、本人ができていたり認めて欲しいと思っていることなどを見出し、適切な課題を設定することが重要である。

##### 2 実践研究

全日制高等学校1年女子3クラス(75名)を対象に、実態把握を踏まえた授業における指導の工夫を行い、その有効性を検討した。

##### (1) 実態把握の方法と結果

「高等学校教員のための特別支援教育推進資料」(東京都教育委員会・平成19年)を参考に、特別な教育的支援を必要とする生徒の状況を

表1 特別な教育的支援を必要とする生徒の聞き取り調査項目表

1	興味のある教科とそうでない教科で大きな差がある。
2	板書された内容をノートに書きとることができない。
3	教員の話や指示を聞いていないように見える。
4	授業中、周囲の音が気になり、課題に集中できていないように見える。

確認する聞き取り調査項目表を作成した。(表1) これを基に担任教諭をはじめ複数の教員に聞き取り調査を実施した。その結果、対象となる生徒が3名在籍することが分かった。さらに、授業や行事等で行動観察を行い、実態を把握して指導のポイントを整理した。(表2)

表2 実態把握の結果と指導のポイント

	実態把握	指導のポイント
生徒A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題や活動をやり遂げられないことが多い。</li> <li>・単純な作業は丁寧にやり遂げる。</li> <li>・注意を集中して指示を聞くことが苦手。内容が理解できないこともある。</li> <li>・かかわる生徒が少なく集団活動やグループ学習に参加することが難しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習活動に最後まで参加し学習の目標を達成するために活動の見通しをもてるようにする。</li> <li>・一斉指導の中での指示理解が不十分などがあるため、指示の仕方を工夫し理解を確認する。</li> <li>・円滑な対人関係を図るため、周りに本人のよさを知ってもらい、人とのかかわり方を学び、他の生徒と触れ合う機会を増やす。</li> </ul>
生徒B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の指示は良く聞き理解力はある。</li> <li>・自分から友人に話しかけることが非常に苦手で、集団活動やグループ学習に参加することが難しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・円滑な対人関係を図るため、周りに本人のよさを知ってもらい、人とのかかわり方を学び、他の生徒と触れ合う機会を増やす。</li> <li>・自己評価の低下を防ぐために、学習の目標を確実に達成できるようにする。</li> </ul>
生徒C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話を聞くことは苦手ですしゃべり続けることが多い。</li> <li>・集中して活動を続けることが苦手である。</li> <li>・指示に従って課題や活動をやり遂げられないことがある。</li> <li>・教員の話や指示を聞いていないように見える。</li> <li>・運動は好きでよく取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習活動に集中できないことが多いので、学習課題の設定を工夫し、個別に称賛や励ましの言葉をかけ、学習に気持ちを向かせ活動を継続できるようにする。</li> <li>・指示を視覚化したり言葉を精選するなど、指示の仕方を工夫し、活動を理解して参加できるようにする。</li> <li>・運動は比較的得意なので意欲を引き出し、積極的に称賛し、自己評価を高める。</li> <li>・他者から良い評価を得て自己評価を高める。</li> </ul>

## (2) 検証授業の実施

実態把握に基づき、対象生徒への指導を工夫し、検証授業を以下の内容で実施した。

- ・単元名：「チームワークで Good Job！」(体ほぐしの運動) 2時間
- ・学習活動：5・6名のグループでリズムに合わせた運動の創作

①6種類の基本ステップを理解する。 ②グループで基本ステップを練習し確認テストを受ける。 ③ステップに合わせて上半身の動きを作り1曲分のリズムに合わせた運動を創作する。 ④グループごとに発表する。 ⑤振り返りシートに記入する。

## (3) 指導の工夫

3名の対象生徒に対しそれぞれの実態に応じて具体的な指導方法・内容を工夫した。

### ア 学習活動に見通しをもたせる指導の工夫

【学習課題の明確化】学習活動を上記の①～⑤の5段階に分け、一つずつ達成可能な分かりやすい学習目標を設定し見通しをもたせた。特に①のステップの理解では、ウォーキングステップから練習し、失敗せず安心して次のステップに進めるようにした。また、ステップの確認テストでは合格するたびに合格シールを渡して、達成感を得られるように工夫し、学習活動への集中を持続させた。(生徒A・B・C)

【指示の視覚化】指示の内容は精選し簡潔な言葉を用いてカードを作製して、視覚的に分かるようにした。説明しながらカードを示して集中させ、説明後はホワイトボードに掲示

し、いつでも確認できるようにした。また、グループの色を決めて練習場所のマークと色を一致させるなどカラー表示も利用した。(生徒A・C)

【個別の指導】前日に、生徒Aには基本ステップを教えて一緒に練習し、生徒Bへは苦手とする他の生徒への言葉かけの内容を教え、安心して学習に参加できるようにした。授業中は、自信をもって活動できるように成功のたびに称賛や適切な評価の言葉をかけ、アイコンタクトをとりながら励ましの言葉かけや個別のアドバイスを行った。(生徒A・B・C)

#### イ 人とのかかわりを広げる指導の工夫

【グルーピングへの配慮】固定された生徒との活動により人とのかかわりの不安を軽減できると考え、5-6名の学習グループを設定した。グルーピングは、東京都教育委員会や埼玉県教育センターの研究報告を参考に作成した

表3 グルーピングのためのアンケート

1	決まりを守った行動ができます。
2	置かれている状況や立場の判断ができます。
3	友達と協力した班行動がとれます。
4	始めたことは最後までやり遂げることができます。

事前のアンケート(表3)により、自律面、配慮面、主張面の三つの観点から全生徒の実態を把握し、その結果を基に行った。かかわりの苦手な生徒A・Bは、配慮面と主張面の得点が高くコミュニケーション力のある生徒と組ませた。また、適切な学習活動が苦手な生徒Cは、自律面の得点が高い生徒と組ませた。

【肯定的な言葉かけ】生徒A・Bは自分から人にかかわることが苦手で、他の生徒への声のかけ方が分からないため、ほめる、励ます、感謝するなど、相手を肯定する言葉を具体的に示し理解させた。また相手の行動に自分の気持ちを付け加え、「分かりやすく教えてくれてありがとう」等のような言葉の使い方を事前に模範を示し学習内での使用を促した。

【かかわりが明確な活動】グループ内でハイタッチやかけ声をかける活動を学習に取り入れ、視線を合わせたり手を触れ合ったりすることを体験させた。(生徒A・B)

#### ウ 学習環境への指導上の配慮

【学習環境の整備】不要な掲示物等を片付けて周囲からの刺激を少なくした。(生徒C)

【発表の場所】練習場所で発表し、見学者の視線を分散させ緊張を緩和した。(生徒A・B)

【役割の分担】グループの活動では、6つの基本ステップを分担して教え合い、司会・記録・連絡・道具係を決めるなど各自の役割を明確にした。対象生徒には得意な役割を割り当て、各自のよいところがグループ内で評価されるように配慮した。(生徒A・B・C)

#### (4) 検証授業における生徒の様子

検証授業における生徒の様子と授業後のワークシートに書かれた感想を表4に示した。

表4 検証授業における生徒の様子と授業後の感想

生徒の様子と授業後の感想	
生徒A	<p>【様子】・事前に学習内容を練習して見通しがもてたため、最後まで学習活動に参加し、発表ではリズムカルに的確に動けた。</p> <p>・指示を聞く場面では、常に視線がカードに集中し、内容をよく理解していた。</p> <p>・練習では自ら話しかけることは少なかったが、終始笑顔で活動し、ハイタッチでは他の生徒と目線を合わせ、小さな間違いを仲間と笑い合うなど、仲間と交流することができた。</p> <p>・割り当てられた役割を確実に果たしたことがグループ内の生徒にも評価された。</p> <p>【感想】・今日の課題をグループ全員で楽しむことができた。</p>

生徒 B	<p>【様子】・発表では他の生徒と肩を組み手をつなぐなどの動きも臆せずに行えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動中自ら話しかけることはほとんどなかったが、笑顔でいることが多かった。</li> <li>・グループ内の生徒からの言葉かけに答え、ハイタッチでは視線をしっかりと合わせていた。</li> </ul> <p>【感想】・発表については恥ずかしいけどまあまあできた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループの生徒と一緒に創って発表し、楽しかった。</li> <li>・どんな時にどんな言葉をかければよいか分かった。</li> </ul>
生徒 C	<p>【様子】・学習課題を分割し目標を達成するたびに合格シールで成功を明確にしたため、最後まで学習活動にしっかりと取り組んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指示の視覚化により授業観察時よりも教員に視線を向け集中して聞いていた。</li> <li>・自分の役割を遂行し、他者からも良い評価を得ることができた。</li> <li>・整然とした環境の中で気を散らさず活動を続けた。</li> </ul> <p>【感想】・授業を受ける前はやりたくなかったが、やってみるととても楽しかった。</p>

### Ⅲ 研究の結果と考察

#### 1 特別な教育的配慮を必要とする生徒への指導の工夫の効果

対象生徒3名の授業の様子から以下の指導の工夫が有効であることが確認できた。まず、学習課題を区切り課題を分かりやすくしたため、活動の見通しがもて最後まで意欲的に取り組めた。また指示の視覚化により活動への理解が深まり、集中して学習を進めることができた。次に肯定的な言葉かけやグルーピングへの配慮を行ったことで、安心して他の生徒とかかわり意欲的に学習活動を行うことができた。さらに、発表場所に配慮した結果、学習成果を十分に発表できた。また係などの役割を設定しグループに貢献する活動を明確にしたため、目的意識をもって学習に取り組み、グループ内の他の生徒の評価を得て、自己評価を高めることができた。

#### 2 特別な教育的支援を必要とする生徒の聞き取り調査の効果

聞き取り調査項目(表1)を教員に提示したことで実態把握の視点が明確になり、休み時間など授業以外の行動の情報も多く得ることができた。また、このことを通して、教員の特別な教育的支援を必要とする生徒への気付きや配慮の必要性の意識を高めることができた。

#### 3 指導の工夫の他の生徒への波及効果

全生徒の振り返りシートによると、「授業の流れが分かり積極的に課題に取り組めた」「カードを使った説明は分かりやすかった」など、工夫した指導への肯定的な内容が多く、他の生徒に対しても課題の明確化や視覚的な指示等が有効であることが分かった。

#### 4 考察

実践研究を通して、特別な教育的支援を必要とする生徒の実態に即した指導の工夫を行えば、意欲を高め自信をもたせることができること、また視点を明確にした実態把握が教員の理解啓発を促すこと、そして視覚的な指示等の指導の工夫が他の生徒にも有効であることがわかった。

高等学校に特別な教育的支援を必要とする生徒が入学しているが、単位取得への不安感や人間関係の困難さから不登校など二次的障害を起こす場合もある。教員は生徒の学習面や行動面でのつまづきにいち早く気付き、特性を理解して実態に応じた適切な支援や指導を行う必要がある。

### Ⅳ 今後の課題

本研究は、体育における指導の工夫について検証したが、これらは他の教科にも共通する内容である。今後は他の授業においても、さらに指導の工夫を充実させその有効性を検証していく。また、最初の気付きや実態把握、有効な指導方法等について教員の共通理解を図ることが大切であり、校内の支援体制の整備も必要である。